

戦後四九年、広島への記憶

榎本武次

東中野三丁目

本格的にB29の空襲が始まった。昭和二〇年二月陸軍船舶特別幹部候補生三期生として、瀬戸内海に浮かぶ香川県小豆島所在の船舶特別幹部候補生隊に入隊。三ヶ月間の船舶兵としての基礎訓練を終了。五月に広島県江田島町幸の浦船舶練習部第十教育隊に海上特攻隊要員（陸軍の海上特攻隊の訓練部隊である。ベニヤボードに二五〇キロ爆雷を搭載、敵艦船に体当たり特攻。一期生の八〇％は比島。沖繩。戦に特攻出撃、大多数が戦病死）転属特攻出撃の訓練中悲劇の八月六日を迎える。

一、原爆投下

昭和二〇年八月六日晴れ。朝から真夏強烈な太陽が始まった。朝食後、当日の訓練の準備のため各自その準備中、突然「ピカッ」とマグネシウム色の閃光を認める。「オヤッ」と思った途端、一大音響と共に猛烈な爆風によりバラック兵舎がかなりひどく揺れ動いた。異常を感じ近くの防空壕に緊急避難する。その後海岸に出て見ると、広島上空は一杯のキノコ雲に覆われていた。

二、救援出動

午後の訓練は中止。全員兵舎内で待機を命ぜられる。午後三時ごろ非常召集。隊長より広島へ救援出動する旨の命令を受ける。直ちに大発にて広島へ向かう。

船舶練習部軍用棧橋に上陸。直ちに救助活動に出動。棧橋を出て一歩足を入れた瞬間、煤を刷いたような黒く汚れた顔。ボーボーに振り乱れた髪に上半身はだか、顔にはケロイドの素足の婦人、顔から背中にケロイド、衣服はボロボロ、ドンヨリとした虚ろな目を向けるだけで何の反応も示さない人、さながら地獄絵同然。小生は啞然となり冷水を背中にかけられたように身震いがした。

未だにあの時の記憶は忘れることが出来ない。徒歩にて進むにつれて、左右に立ち並ぶ家屋の被害の度は益々大きくなる。御幸橋を通過する頃から障害物は益々数を増し、破壊された自動車、電車、倒れた電柱、道路一杯に垂れ下がった電線など、障害物で道路も埋まっている。建物は内部が猛火に包まれ、総

ての窓から炎と黒煙を吐き出し、断末魔の形相、足元には焼け爛れた死体だ。何とも言えぬ悲惨な状況の中担当地へ向かう。

三、救援活動

午後七時頃、相生橋（担当地）到着。負傷者の救助作業（川岸の負傷者、建物疎開作業に出動の方々）。一步土手に入ると、足の踏み場のないような負傷者の群れ、全員焼け爛れた人々が横たわっている。喘ぐ声、声を出す元気のない者、まさに生地獄そのもの、「兵隊さん、水をください」「水をください」そこかしこから「水、みず」の哀願に、我々一同なすすべを忘れてしまう一瞬であった。収容できるだけの人員を搬送、己斐の国民学校に収容、治療医薬品（マーキュロ液、亜鉛華軟膏）は皆無の状態に等しかった。

収容作業終了後、本部のある広電の車庫に帰営。レールを枕に今日一日地獄絵を脳裏に刻みつつ仮眠す。

四、道路啓開、死体収容

八月七日晴れ。今日も真夏の強烈な太陽が輝いている。起床して明るい光の下に晒された焦土の姿を、完全に壊滅した街の状況に惨憺たる思いを一層深く胸に感じる。

午前の作業は道路啓開。散乱する電柱、電線、牛馬の死体（馬の死体の重さにはびっくり）などの除去作業。焼けた瓦は掘り返すと、その中練炭のように炎をあげて燃えている。

午後は元安川の半壊の紙倉庫跡に移動。雨は十分凌げる建物

である。各自住居区の整理、至る所に横たわる悲惨な焼死体を一ヶ所に収容。死体の放つ特有の悪臭を漂わせている。

五、死体収容、火葬

八月八日～十一日晴れ。連日真夏の炎天下の暑さが続く。収容死体の火葬用の穴を掘り、付近に散乱する丸太、板切れなどを集めて並べ、約五、六体を一つの穴に収容して、一体ずつ住所、氏名、性別、年齢、特徴など身元の判明できる者は詳しく記録し、焼死体の中には性別の区別もつかない者も多かった。火を点けると、死体特有の臭気を発しながら、ジューツ、ジューツと油煙をあげて焼ける様相は何とも言えない悲哀を感じたものであった。

また、身内の死体を家族の手で火葬することが出来ずに、「兵隊さんお願い致します」と言つて、遺体を持参して来る遺族もあった。収容した死体の多くはブクブクに膨張し、水に浸かった体はすっかりふやけて青白くなっており、皮膚はズルズルで焼けにくく、本当に苦勞させられたものである。

本部への伝令は二名一組で、散乱している死体の中を往復するのだが、その途中で水筒に手を掛け「兵隊さん、水を下さい」と半死半生の方から言われたときの怖さ、身の毛も逆立ち、冷汗が流れた反面、人間の生命力が如何に強いかを痛感したものである。

そろそろ悪臭にも慣れ、若い体に食欲も出て来て、救援隊も

増加したが続々と運び込まれる死体も増加し、火葬作業は追いつかない状態であった。火葬が終わった所から、板切れに記録を記入して仮埋葬する。

火葬作業が一段落したある日の午後、幸の浦から精神訓話担当将校（広島出身の僧）が来訪されて、仮埋葬の塚を一つずつ懇ろに法要され、被爆犠牲者の冥福を祈られ、その光景は私達の胸を強く打たずにおかなかった。一発の爆弾が引き起こした悲劇。何十万という人々が無残にも焼き殺されたり、一生を台無しにされた。また、中国地方第一の都市広島由市街を瞬時のうちに壊滅させ、まさに生き地獄の巷と化し、死の街に変えてしまったのだ。戦後既に四九年、当時十七歳の私も還暦を過ぎ、記憶も薄らぎましたが、思い出すままに寄稿致します。

終わりに被爆犠牲者の方々の御冥福をお祈り致します。

（注）八月六日第十教育隊約一、〇〇〇名が救援活動に入市。
当日の救援隊としては最大部隊であった。

